

# 「等身大」をもとめて

明星大学 宮川 健郎

日本の現代児童文学の出発期の作品、たとえば、『龍の子太郎』（松谷みよ子、一九六〇年）の太郎や、『山のむこうは青い海だった』（今江祥智、一九六〇年）の次郎は、社会変革や自己変革をしていく主人公だった。以前は、こうした理想の子ども像を描いた作品が、子どもの成長を願う大人たちによって、子どもたちに手渡されていったのである。ところが、九〇年代以降は、変化が見られるようになった。

『四月の野球』は、ギャリー・ソトの一九九〇年の短編集。ソトはメキシコ系アメリカ人の作家だが、邦訳の訳者もいうように、マイノリティの文学でありながら、作品は、むしろ一般性を獲得している。つまり、日本の児童文学のあり方ともつながっているのだ。

表題作「四月の野球」のマイケルとジェスの兄弟は、三年連続でリトルリーグの入団テストに落ちる。「なんでおれが受からないんだ」——今回、兄のマイケルは、守備もバッ

ティングもうまくいったのだ。結局、兄弟は、学校の友だちがメンバーになっている別のチームに入る。それは、とても弱いチームで、ふたりは、野球そのものを徐々にあきらめていく。子どもたちには積極的に生きていくってほしいけれど、何もかもうまくいくわけではない。あきらめて、現実と折り合いをつけるというのも、実は、子どもの文学の重要な主題なのではないか……。

長谷川集平の絵本『ホームランを打ったこ



『四月の野球』  
ギャリー・ソト=作／神戸万知=訳  
理論社／1999年



『ホームランを  
打ったことのない君に』  
長谷川集平  
理論社／2006年

とのない君に』のルイは、チャンスに大振りしてゴロ。試合は負けてしまう。ホームランだと逆転だったのに……。もつとバッティングがうまくならない。ルイは、試合でホームランを打ったことがないのだ。「いきなりは無理さ」——仙ちゃんがいった。出島商業野球部のレギュラーだった仙ちゃんも、試合ではホームランを打つことがないという。

ここには、多くの子どもにとって等身大の主人公が描かれている。そして、等身大の自分が見出せたとき、あらためて生きることがはじまるのだ。仙ちゃんが、またいう。——「夢見るだけにしとくのかい。」ルイは思う。「ありがとう。ほく、いつかホームランを打つよ。でも、その前にまずヒットだね。」

みやかわ たけお 日本児童文学専攻。著書に『現代児童文学の語るもの』（日本放送出版協会）など。